理学と理学部

清　水　忠　雄（物理学専攻）

古き佳き時代の理学部の末期から，新しき活気ある理学系研究科の黎明の時期まで長い間，何の不満も不足もなく，大学生活をエンジョイさせていただいたことに，先輩・同僚そして私より若い諸先生がたに感謝申し上げたい。さてここで昔は何がよかったのかと問われても，具体的には答えられない。年をとると陥りやすい理不尽な懐古趣味にすぎないのかもしれない。今の世の中，情報があり過ぎるのか，周囲で何が起こっているか，絶えず注意を払っていないといけない。しかし“昔”は，“好意的な無関心”とでもいうのか，他人様のする事は，何か良く見える，どんどんされたらよいでしょうというようなムードがあったような気もする。一方で他人が良くなれば，自分も良くなるというような一体感とか仲間意識が強かったような気もする。もっともその“おおらかさ”のつけが，今まわってきて，理学部の現執行部が，きりきり舞をしているのだとしたら申しわけのないことである。

さてこの一体感の正体であるが，大げさにいえば，理学部というまとまりの存在の意義であるが，考えてみると，つかみ所がない。早い話いま学生諸君は，確かに○○学科は卒業したのであるが，理学部を卒業したという意識がもてるのだろうか。(同じことが“東京大学”についてもいえるかもしれない。近頃ユニバーシティという一体感が実感として存在しているのだろうか。)

大学全体のことはさておいて，わが理学部でも最近いろいろなことが起こった。数学の教官団が理学部から離れ，数理科学研究科が設立された。柏キャンパスの新研究科創設にからんだ，生物学系の学科群の動向が注目されたことは記憶に新しい。理学部或いは理学の危急存亡にかかわる事件であったともいえる。そこで今日の時点で理学部の教官が理学というものをどう認識しているのか，貴重な議論が闘かわされるのではないかと，実は大いに興味をもって期待していたのであるが，幸か不幸か数学の場合は議論より速い速度で実践が先行してしまい，生物学の場合は，頭のよい妥協的な方策で問題が落ちつくかに見えて，議論が沸かなかったことはむしろ残念であった。しかし語るに落ちた，いや語らずに落ちたというべきだろうか，これらの事件の間に，理学共同体に対する人々の認識が垣間見えていたような気もする。

辞書の定義によれば，「理学」とは狭義の自然科学に相当し，自然現象あるいはそれを支配する法則を探究する数学，物理学，天文学，化学，生物学，地学をさす。広義の自然科学に含まれる実用生活への応用を目的とする工学，医学，農学とは区別されている。おもしろいことに（？）数学は論理学などと同じく形式科学として，自然科学からは除くという考え方もあるようである。まるで東京大学の組織上の分類を根拠づけているような定義である。しかしだからといって，これらを生業とする職業集団がそれぞれ一緒になっていなければならないということを説明してはいない。

明治以降の学制の変遷の中で，「理学」という概念がどのように形成されてきたのであろうか。明治の初期には理学はフィロソフィ（哲学）の訳語として用いられたり，化学や数理学と並記される物理学に近い内容をもった分野を意味したりしていたという混乱がみられる。

1877年に東京大学は，法・理・文・医の四学部をもって創設されたとあるから，そのときの理学はいまより広い領域を含んでいたと思われる。事実1885年には機械・土木・採鉱冶金・応化・造船などの諸学科が理学部より分離して工芸学部をつくった。1886年に帝国大学令により法・医・工・文・理の五つの分科大学が設置されたとあるので，現在の理学部の原型はここにでき上がったものと考えられる。1919年分科大学が再び学部と改称された際に，理学部には地理学科が新設された。それ以降も学科の分裂，統合はくりかえされるが学部としての外枠は動いていないように見受けられる。

その後多くの学科への細分化がめざましく進んだ工学部と比較すると，生物化学科や情報科学科など境界分野や周辺分野での学科の新設も一，二あったものの，理学部の学科構成は約一世紀にわたり実に安定していたことは特筆すべきことに思われる。ここに何か理学という学問分野の特質が現れているようにも思える。

因みに1953年新制の大学院が発足してからしばらくの間は，（我々はそのとき大学院生であったのだが），学内を専門別に横断的に組織化した生物系，数物系，化学系の三研究科が存在していた。どんな理念でこれが行なわれ，またそれが1965年にわずか10年程で再び（？）理・医・薬・工・農の（学部に直結する）五研究科に改組されるに至ったか，大変示唆に富むできごとだったように思われるが，真の理由は，一学生だった私の詳らかにするところではない。

学部が構築されていく過程をみると，学問上の理念とは別に，組織運営上の行政上の分類として，かなり便宜的な考え方が実行されてきたというきらいがないわけではない。それが過渡的なものか，永久的なものかわからないが，いまでも理工学部とか文理学部とか統合された呼称をもつ学部がある一方で，基礎工学部とか環境工学部とか分化されたものも見られる。しかし一方で我が理学部のように，長い経緯を経て，落ちつくべきところに落ちつき，そして更に長い期間にわたり素晴らしい安定度を示してきたものも存在する。

研究者の側から見れば，学問分野の分類や統合は本来必要なものではない。利害が一致していれば一緒になっていればよいし，対立すれば別れていけばよいものであろう。しかし教育組織となればそうはいっていられない。学問分野間の有機的な連関に基礎をおいた分類と，行政上の分類とは区別されなければならないはずのものであろう。

我が理学部は（少なくともこれまでは），この二つの区分がまがりなりにも過不足なく一致していたかに見える。そこに誇るべきスタビリティの原因があり，一方ではややっこしさがある。すなわち一体制の意義が問われることになる所以である。頭のよい人たちは，教育は一緒に，研究は別々にしましょうということで，わかったようでもありやはりよくはわからない提言をしてこれを果断実行してしまった。

それを弊履の如く捨て去るには，あまりにも伝統の重みがある。しかし一方で今日的な根據のない（かもしれない）外枠は，若い芽にはうっとうしい存在になる。だれでもが納得するような結論は得られないだろうが，これまでもそうしてきたように学問の進展に応じて，「いろいろやってみたら」というところだろうか。また学部の解体が一方では大学全体の一体感の向上につながっていくかもしれない。